円覚

令和3年正月号

332号



臨済宗円覚寺派 長

永 横 田 田

管

宗務本所一 正 南嶺 和 同

宗務総長

令和三年 元日

円覚332号目次

管長猊下 色紙 ⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯ 表紙Ⅱ 信心ことはじめ ③ ・・・・・・・・・・・10 鈴木大拙の言葉と生涯(一)/蓮沼 直應 20

表紙・裏表紙写真/円覚寺派宗務本所

南嶺老大師筆

管長 横 田 南嶺



次の道歌を思い起こします。 令和三年、 丑年を迎えました。牛というと、

牛の歩みのよし遅くとも 怠らず行けば千里の外も見ん

は 悠々と歩んでいます。 という歌です。 ゆったりとどっしりと大地に足をつけて、 馬のように千里を駆けるのではなく、 牛

> 應師に担当してもらいました。 記念の年で、 の監修に携わらせていただき、 一言』という一書が刊行されました。私もそ 昨年は鈴木大拙先生の生誕百五十年と 致知出版社から 『鈴木大拙一日 その中に、 編集を蓮沼直

ころでも上がっている 歩一歩努力すれば、 歩一歩上がれば何でもない 11 つの間に か高 いと

(『致知』二〇一七年六月号

上田閑照・岡村美穂子対談)

『鈴木大拙一日一言』発売記念Youtube Live (10月14日 致知出版社企画)

という言葉を収録しています。

まで、 歩一歩歩み続けられたご生涯でありました。 生が答えられた言葉です。 はすべて手書きでありました。 変だと思いますが、 で続けられました。 個人詩誌『詩国』を毎月発行されて、五百号ま 歩みを進めてゆくことの大切さを思います。 上るのは大変でしょう」という人に、 の方に郵送されていたのでした。 なければなりません。「九十を越えて、 詩人の坂村真民先生もまた、そのように一 大拙先生は、 そこへ行くには百三十段もの石段を上ら た。松ヶ岡文庫は東慶寺の裏山の上にあ 松ヶ岡文庫に居して著述に励まれてい 九十五歳でお亡くなりになる 毎月詩を作るだけでも大 その詩誌を毎月千二百名 一歩一歩、 封書の宛名 階段を 大拙先 確かな

に加えてもらっていたのでした。 ていただいていて、 私も高校時代と大学時代に、『詩国』を送っ その千二百名の中の一人

がございます。 そんな真民先生の歩みを端的に表現した詩

こつこつ

こつこ 7

書い てゆこう

こつこつ

こつこつ

こつこつ

歩いてゆこう

こつこつ こつこつ

掘り下 げてゆこう

らきています。

牛に生まれて、農家の方と共に働きながら生 きてゆくというのです。 に輪廻からの解脱だけを求めるのではなく、 それから更に、 大乗仏教の願いとして、単

方にとって親しい存在であったかがうかが われます。 こんな話などからも、 如何に牛が当時 0

です。 ます。 禅の 十枚の絵に漢詩が付けられて 語録には『十牛図』というものがござ 11 るも 11

その十枚とは

尋牛:牛を探しに旅に出 でんぎゅう る

<u>_</u> 見けんせき ・・ 牛の足跡を見つける

三、見牛: 得学り ようやく牛を見つける 野生の牛はすぐ暴れ出

す

言葉が残されています 牛は禅の語録によく登場する動物です。 の禅僧南泉普願禅師には、 次のような

した。 れますかと問いました。南泉禅師は、山の麓に、修行僧が、和尚は亡くなってどこに行か 食べる藁をくわえて来いと答えています。 かと聞くと、 で一頭の水牛になって生まれてくると答えま 同時代の潙山禅師もまた、死んだ後には、 南泉禅師がいよいよお亡くなりになる 僧が、 私について来るのなら、自分の 私もお伴してよろしいでしょう

麓の 受けたとしても、それに十分報いるだけの修 わって来ようと言っています。 この話はもともと、 檀家の家に一頭の水牛となって生まれ変 出家して修行し施 しを つ

行ができていないと、牛や馬に生まれ変わ 受けた施しの分を償うのだという考えか

六 ゼ 騎牛帰家:牛に乗って故郷に帰る牧牛:暴れる牛を如何に飼い馴らすぼくぎゅう か

七、 忘牛存人:飼い馴ばうぎゅうそんじん まってい らし た牛は忘れて

無の世界から有の世界へ還る 人も牛もい 町に出て人々のために働く ないゼロ \mathcal{O}

を表しています。 牛を探してゆくのですが、 本当の自分とは何かを探 牛とは真の自己

求めてゆくのです。

教えを弘めさせ、 弟子となったものは、 れました。その間にお釈迦様の教えを聞 てから、なおしばらくそこにとどまっておら お釈迦様が鹿野苑で最初のお説法をなさ 弟子たちを四方に遣わして、 お釈迦様もまた伝道の旅 六十人にも及びまし この新 いて 61 つ



出ら

た

で

し

た。

そ

 \mathcal{O}

旅

O

途中で、

お

釈迦

様

は

 \mathcal{O}

と

1) 0

森

に入

つ

7

樹

のもとで

瞑

想

て

お

5

ま

た。



円覚寺YouTubeチャンネル 【十牛図に学ぶ】真の自己を尋ねて

0

で

た。

h

11 0

きさつを

聞

17

お る

釈

迦

は、

彼

らに

言

17

ま な

た。「若者たちよ

君

たち

れて

ま

つ

7

そ

女性

を探

し

7

17

と

17

う

性が

逃

げ

な

か

つ れ

で

ょ

う

か

と聞

きま

した

緒に てこ

h

で

17 た

た

女性

に

物

を

5

そこ

に

坐

つ

7

おら

る

 \mathcal{O}

を見

7

ح

つ

ち

に

女

0

中

を右往左往 に若者たち

7

11

ま

た

お

釈

迦 8

様

0

そこ

が

来

あ

わ

7

s

た

17

7

ちが

大事だろう」と。

7

7

を

に

11

ッ 7 るこ

己

]自身を!

探

求

8

る

ことと

つ 8

れ

をどう思う

か

逃げ

た女性

を探

求

えま 探し出すこと した \mathcal{O} 方 が は る か に大切 です」

と答

あ 往左往し 17 0 ŋ た ように言わ ます よう 私が 釈迦様 0) は で 7 17 若者た ま己 ح た。 لح はどうにもなり \mathcal{O} 11 威 0) 自身を探 厳 ような時に 自己を探 8 つ ちよ て、 た あ 0) る で お で す 5 姿 ませ は が よう。 自己を見 と 0) 出すこと そこ は大事 Ě h に そこで 11 5 坐 道を を教 失 なこ を る つ 説 お釈 と え が て で か 7

えたら か を看よ 色 1) どうする を 0 々 な答え 」と答えた僧を認 僧五 ŋ É が 歩 祖法演 0 か あ 11 と修行 n て ま は 17 て め 僧たち たが ま そ 闇 \mathcal{O} \mathcal{O} 明 に 中 Ŧī. 問 袓 か を 61 1) ___ ま が つ \mathcal{O}

闇 0 中 どう進んだら 13 17 0 か 分 か らな

> と我に返り 17 17 た彼らは、 時 な忘れ は ました。「それ まず脚下 その 遊び、 お釈迦様 我 を看ること を忘 は、 ħ \mathcal{O} もちろう 問 女 17 で 性 か ん自分 け

迷 な に 11 つ 尋 7 何に ね しま 7 も も つ て、 な 自分が りません どう進んだら ?何処に 17 る 17 \mathcal{O} 11 す か 0 分 か 道 か 他 13 6

ます な た以 つ 新 型 7 コ ゆ 上 口 ナ 大 0) きく か `` 先行きの ス ح (感染症 れ か 不 5 \mathcal{O} 安 11 影響 な つ 時 た で 61 どう あ (N

にこ 己と は 0) 牛図で示され 十十四 何 かを求め |を解説 た十 る ょ た本も上 す 枚 が \mathcal{O} と 牛 な \mathcal{O} 梓 絵 ŋ ま は ま す 0 真 0) 自 年

生の たちが え まり んを学ぶ 牛 ます 牛図 ょ のよう す で が と そ は から に れ とする には まず 始 好きな餌ばかり 自己を探す 8 ベ き自己 ることを まずす لح ぐ 説 れ 61 を追 た先 う き ま ろ 0 か は す 1) 0 0) か 5 け

て、 のであっ 感情や欲望ばかりに振り回されているも てはいけません。

という自分中心の思いや欲望に振り回され 感情のままに、 いると気がつくことを十牛図は説きます。 まず自分の心を見つめて、 「好きだ嫌いだ」、「いい悪い」 自分の今の心が

行いが坐禅でありましょう。 ことを学びます。 を調えるのです。 気がついたならば、 よく調えることの具体的な 感情を制御して調える 身体と呼吸と心

実した無であると表現しています。 相という○が出て来ます。これは決して単な とに打ち込んで、 るカラッポではありません。 分を忘れるのです。 悪い」と好き勝手なことばかり言っていた自 よく調えていって、「好きだ嫌い 我も人も無くなり、 十牛図では八番目に一円 私は、 だ これ 一つのこ 時間も を充 61

> す。 どこにいるのかも忘れ去った心境であ が外れるのです。 そうすると大いなる自己に目覚める 自分と外の世界とを隔ててい たた枠 りま ので

と説いてくれているのが十牛図です。 になって現れます。 りの人の為に尽くしてゆきまし 最後に慈しみや思いやりの心にあふれ をありのままに観ることができます。 そうなってこそ、 それが本来の自己である はじめてこの現実の世界 ょうとい そ て、 · う 姿 して

のは、 ています。 ると説かれました。 お釈迦様は、自己こそが自己のより所 「よく調えられた自己」であると示され しかし、 その自己という であ

の言葉で、 意されてきていますが、 コ ロナ禍にあっては、 身体と言葉と心を調えて仏様と 「三密」を避けよと注 「三密」 は元来仏教

言を唱えて、 一つになる教えでした。 心に仏様を念じて一つになるの 身を正して、口に真

を調えることにほかなりません 身体と言葉と心を調えることこそが、

うことである。」(『鈴木大拙一日一言』 十二月 関わり合い、 の存在は、 人に対して温かい心で接してゆくことを心が 一日章)と説かれているように、 そして、 1) いることを自覚して、 何らかの 無限にひろがり一切を包む愛の のであります。 鈴木大拙先生が「それぞれ その事実を意識すると否とに 思い合うつながりの中に生かさ おかげをこうむっているとい 自分もまた周りの お互い 0) 関係 かかか

してくる(坂村真民「必然」)」と信じています。 そうし てい ば 「夜は必ず明け光は必ず射

> 歩しっかり大地を踏み ています。 年頭にあたり、 牛の歩みのように、 しめて参りたい 、 と 思

